新潟青陵大学大学院
臨床心理学研究　2015.vol.8　39～45

スクィグル法におけるなぐり描き線の意味について
－体験と被受容感・被拒絶感の視点から－

鈴木　陽子（新潟青陵大学大学院　臨床心理センター）
浅田　剛正（新潟青陵大学大学院　臨床心理学研究科）

キーワード：スクィグル法における体験、なぐり描き線、被受容感・被拒絶感

Significance of a scribbled line in “squiggle game”
-from a viewpoints of experience in “squiggle game” and their sense of acceptance/rejection-

Yoko SUZUKI（Clinical Psychological Center in Graduate School of Niigata Seiryo University）
Takamasa ASADA（Graduate School of Clinical Psychology, Niigata Seiryo University）

Key words：experience in squiggle, scribble line, sense-of-acceptance and rejection

Ⅰ．問題と目的

二人の人物が場を共有し何かを成そうとするときには、極めて多くのことに思いを馳せる。二人の間で成そうとする事物自体への思いや、視線・挙動などから推測される相手の思いなど、多くの事象を踏まえて自身の行動を決定していくことになる。その過程で、我々は数え切れないほどの体験をする。そういった二者関係の中で生じてくる何らかの体験を目に見える形で残すものの一つとして描画法が挙げられる。

本論では、描画法の中でもWinnicott.D.Wが臨床場面で用いた二者が交互に紙に何かを描き一つの絵を作る方法であるスクィグル法を取り上げる。ここでは中井（1982）によるスクィグル法の紹介を参考にし、描線段階を行う者を「サーバー」、投影彩色段階を行う者を「レシーバー」とする。一方が「描線段階」で思いつくままになぐり描き（サーブ）をし、他方が「投影段階」でその描線の上に投影し補助線を加えて（レシーブ）完成させる。この役割を交代しながら何往復か行い、多くの場合は一往復する度に一つの絵が出来上がる。これにより、二者が言語を使わずに目に見える形でやり取りをすることができることになる。

徳田ら（1998）が述べるように、「絵画を相互の間においてのクライエント（描く者）と治療者との安定した三者関係のもと、言語化という話し合いの過程まで進める。そこで少しでも自己の内界を表現し洞察し受容でき、同時にその結果を治療者と分かち合う」体験は、スクィグル法において特徴的に表れると考えられる。スクィグル法では、クライエントだけが描画表現する他の多くの描画法に比べて、二者が交互に描画を行いそれを互いに目に見える形で画用紙の上に表現する。つまり、スクィグル法という描画法においてクライエントは、表現し受容される側だけでなくなり、セラピストに表現され、受容する存在ともなり得るのである。そのような三者関係が、目に見え、残る形で表現される点がスクィグル法の特徴といえよう。

飯塚（2008）は、スクィグル法について、近年は「投影段階」に重きがおかれ、「描線段階」は単なる投影の対象であり、意味のない曖昧な物として扱われていると指摘している。当然ながら、「描線段階」で成されるなぐり描き線も他ならぬ表現の一つであり、内的世界を想像するための重要な手がかかりであると言えるであろう。山崎（2008）は、サーバーが描いた描線がレシーバーが描く「内容」を規定することを示唆し、「描線という「モノ」がゲームの展開を左右する」と述べているように、サーバーのなぐり描き線の働きや影響力に着目した研究

も随所でみられる。それと関連して、Kellog（1969／1998）は、幼児のなぐり描き線のパターンを分類し、そのパターンと配置様式を発達の過程と関連付けており、なぐり描き線によって描いた者の内的状態を把握しようとした。また、発達の過程だけでなく、中植（2004）が、スクィグル法における攻撃的表現を分類し、その中で「投影しにくいスクィグルや乱暴な描き殴り表現」を攻撃情動として捉えているように、なぐり描き線がサーバーの特性またはレシーバーの投影と関連していることはこれまでも指摘されてきている。しかし、なぐり描き線のみに焦点を当て、人格特性との関連を実証的に調査した研究は少ない。なぐり描き線が示す描き手の特徴について様々な知見を得ることにより、スクィグル法における三者関係をより丁寧に思量するための材料が豊かになることが期待されるのではなかろうか。

筆者は、スクィグル法の二つの特徴に注目した。すなわち、一つは他者のなぐり描き線を自分なりに変化させる経験、そして反対に、自分の描いた描線が他者によって変化させられる経験もするという二側面を併せ持つ特徴である。クライエントはこの経験の中で、自分の行為がどう受け入れられ、許容されるのか、または、困惑され、拒否されるのかを目の当たりにするであろう。元来の人格特性として、自分の行為が相手に許容されている感覚、または拒否されている感覚を持ちやすいか否かによって、この経験の捉え方が異なると推察される。それによりスクィグル法における表現や体験にも差異が現れると考え、被受容感・被拒絶感の強さとなぐり描き線、および描き手のスクィグル法体験との関連性を検討することとした。

二つ目の特徴は、中植（2004）が、サーバーのなぐり描きの描き方や人格が、レシーバーが「投影しやすいか否か」に関連していることを指摘したように、なぐり描き線の形やサーバーの人格が、レシーバーに投影しにくい印象を抱かせる場合がある点である。また、藤内（2008）は、「尖った描線」に対する投影するまでの反応時間が、「ぐるぐるした描線」に比べ有意に遅くなり、レシーバーは「尖った描線」をみると、窮屈さや緊迫感を感じることを示している。なぐり描き線について言及したこれらの先行研究もあることから、なぐり描き線と被受容感・被拒絶感という人格特性の関連だけではなく、サーバーのなぐり描き線がレシーバーの行動や感情にどのような影響を及ぼすかについても調査を行う。

Ⅱ．調査方法

１．調査対象者及び調査時期

A大学福祉心理学科の学生から被験者を募集したところ、調査協力者は19名となった。平均年齢は21.6歳（SD=2.3歳）、男子５名（平均21.2歳，SD=1.1歳）、女子14名（平均21.8歳，SD=2.7歳）であった。2012年10月から12月末までの期間で調査を実施。調査者と一対一でスクィグル法とインタビューを実施し、一人１時間程度の調査を行った。

２．質問紙調査

スクィグル法を実施する前に、杉山・松本（2006）が作成した被受容感・被拒絶感尺度を実施した。この尺度では、受容的対応を「他者の理解、承認、尊重」や「自分への肯定的な関心（愛情やあたたかさ）」として、また拒絶的対応を「自分への無関心」や「自分への嫌悪感」として概念化し、全般的で特性的な対人関係要素の測定を目的としている。下位尺度である被受容感、被拒絶感はそれぞれ８項目から成り、５件法となっている。答える下位尺度項目の順序による影響を避けるため、下位尺度の順序を変えてカウンターバランスを取った。

３．スクィグル法の調査手順

質問紙を実施した後、調査者（以下、Tとする）と被験者（以下Cとする）の２名でスクィグル法を行う。今回の調査で行ったスクィグル法は「①Tのサーブ→Cのレシーブ」「②Cのサーブ→Tのレシーブ」「③Tのサーブ→Cのレシーブ」の①～③までの流れを一人のCに対して２巡行った。

①の段階では、Tが画用紙にサインペンで曲線（図１）、または角線（図２）を描くという形でサーブをする。Tが始めにサーブをしたのは、スクィグル法を初めて行うCに対し、どのようにサーブを行ったら良いかを教示するためである。始めのサーブがCに影響する可能性もあるため、１巡目の①の段階でTが曲線のサーブをする調査（パターン１）と、角線のサーブをする調査（パターン２）の両方を実施した。カウンターバランスを取るため、この二つのパターンの施行順序を入れ替えて、被験者ごとに無作為に割り当てて施行した。②の段階で、①とは別の画用紙にCにサーブさせ、それに対しTがレシーブした。③の段階では、１巡目も２巡目も同じようにTがサーブとして真っ直ぐな横棒線（図３）を描き、そ

図１　曲線

図２　角線

図３横棒線

れに対しCがレシーブを行うこととした。これは、１巡目と２巡目の比較を行うため、単純な直線をサーブすることで、できる限り同じような刺激線を提示することを意図している。

４．スクイグル法後のインタビューについて

被験者のスクィグル法での体験がサーブやレシーブにどのように関連してくるのかを聴き取るために、スクィグル法終了後にインタビューを行った。インタビューは半構造化面接の形で行い、必須のインタビュー項目を（１）最初にレシーブするときの感想、（２）サーブするときの感想、（３）サーブに描き足されたときの感想、（４）「曲線」と「角線」にレシーブするときの感覚の違い、（５）直線へレシーブするときの１巡目と２巡目の感覚の違い、と定め、これらの項目を軸に、思ったこと話したいことは自由に述べて良いものとした。

５．データの分析方法

要因や変数間の関連を検討するため、サーブの描き方やインタビュー内容から得られた質的なデータを分類した。まず、被験者のなぐり描き線を、主に曲線で構成されている描線で、ほとんどの部分が湾曲した線で構成されているのであれば、尖った部分が１,２箇所あったとしても「曲線」とし、一方、曲線が一切なく、角ばった印象の強いなぐり描き線を「角線」として分類した。なぐり描き線を分類する際、客観性や整合性を高めるため臨床心理学を専門とする者２名の協力のもと分類を行った。

また、インタビュー内容については、木下（2003）を参考に修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTAとする）に準じた形で、スクィグル法の中で起こった体験を概念化した。この概念化を行う際も、正確な分析が行われているかを確認するため、臨床心理を専門とする者２名の協力者とともに、インタビューの逐語録から被験者の体験を抽出し、概念名をつけた。

このようにして、質問紙から得られた量的変数と、描線の仕方や報告された体験などの質的変数を、分散分析やχ^2検定などの統計的分析を用いて変数間の関連を検討することを可能にした。なお、今回の調査では被験者が19名と少なかったため、χ^2検定を行う際はイェーツの補正も同時に行った。

Ⅲ．結果

１．なぐり描き線と被受容感・被拒絶感尺度の分散分析

描かれたなぐり描き線から被験者を分類した結果、一度でも「角線」サーブをした者（以下、「角線群」とする。）が８名、一度も「角線」のサーブしなかった者（以下、「曲線群」とする。）が11名であった。なぐり描き線が人格特性とどのように関連しているかを検討するため、角線群・曲線群を被験者間要因、被受容感・被拒絶感尺度の下位尺度を被験者内要因として、２要因混合計画の分散分析を行った。表１は各条件の平均と標準偏差を示したものである。分散分析の結果、交互作用は有意ではなかった（$F(1,17)=0.098$, $p=$n.s.）ものの、「角線群」と「曲線群」の間で主効果が見られた（$F(1)=7.287$, $p<.05$）。

表１　尺度と描線群での各条件の平均及びSD（最大値40）

	被受容感尺度	被拒絶感尺度	n
角線群	30.38（SD=4.95）	18.50（SD=6.14）	8
曲線群	28.00（SD=4.57）	17.73（SD=5.71）	11

２．スクィグル法における体験の分析

分散分析の結果から、被受容感・被拒絶感尺度において、「角線群」と「曲線群」の間には有意な差があることが示された。そこで、このような差が起こった理由を各群が持つ体験の傾向を手がかりにして検討する。

まず、インタビューから得られたスクィグル法で起こる体験報告から、M-GTAに基づき30の概念が抽出された。これらの概念は、サーバー時の体験、レシーバー時の体験、インタビュー時に振り返った時の体験と、３つの時点に分けて定義した。さらに、類似性や関連性のある概念同士をまとめ、８つにカ

表２　スクィグル法体験を概念化したものをカテゴリーに分類

グループ名	グループの定義
後悔	作業終了後に自分の行いを悔やむ体験。（曲：５人、角：９人）
計画	作業開始前にある程度やることを決めてから挑む。（曲：９人、角：７人）
楽観	先行きを考えずに気楽に楽しんで作業をする。（曲：４人、角：４人）
成功	完成したものや、スクィグル法全体に肯定的な感覚を抱く。（曲：４人、角：３人）
独自性	他人から見てもわからない、主観的な想像や経験を絵に投影する。（曲：９人、角：６人）
遠慮	他者が不快な思いをしないよう、自分の行動を慎む。（曲：７人、角：４人）
被影響	他者の行動に影響を受ける。（曲：６人、角：５人）
葛藤	描きたいものややりたいことが２つ以上ある。（曲：８人、角：６人）

テゴリー化したものと、そのカテゴリーの体験を語った被験者の人数を曲線群、角線群ごとに表２に示す。

３．サーブの仕方とレシーブ時の体験との関連

ここで、サーブの仕方とスクィグル法の中で起こってきた体験との関連について検討するために、描線の群（角線群・曲線群）別に、第２項で分類されてきた各々の体験を報告した者としていない者の人数をカウントし、人数の偏りについて検討した。

まず、Tがサーブした描線に対するCが受けた印象によって、Cの描くなぐり描き線が変わるのではないかという仮説を検証するため、インタビュー項目（４）『「曲線」と「角線」に対して描き足すときの違い』について質問した際に“よりたくさんイメージが浮かんだ描線”が「角線」と答えた者、「曲線」と答えた者の人数を、「曲線群」と「角線群」ごとにそれぞれ集計した（表３）。人数の偏りをχ^2検定によって調べた結果、人数の偏りが有意であることが示された（$\chi^2=4.024$、df＝１、$p<.05$）。

表3　描線群別“より多くのイメージが浮かんだ描線”と答えた人数

描線群		曲線群	角線群
よりイメージの浮かんだ描線	曲線	2(4.6)	6(3.4)
	角線	9(6.4)	2(4.6)

（　）内は期待値

４．最初のなぐり描き線と被験者のサーブおよび体験

二者の間で初めて現れたなぐり描き線が、その後の展開にどう影響するか検討するため、Tが１巡目１枚目に描いたなぐり描き線が曲線であった者（パターン１）、角線であった者（パターン２）それぞれで、Cのサーブや報告した体験の違いについて分析した。その結果、１巡目ではTからサーブをしたなぐり描き線の順番（以下、Tのサーブパターンとする）による、Cのサーブ様式に違いは見られなかった。しかし、２巡目のCのサーブにおいては、Tのサーブパターンによる「曲線サーブをした者」「角線サーブをした者」の人数の偏り（表４、左）が、５％水準で有意であった（$\chi^2=4.328$、df＝１、$p<.05$）。

次に、なぜTのサーブパターンの違いから、Cの２巡目のサーブの違いが起こったかを検討するため、まずはCが自身の行動をどのように位置づける傾向にあったのかに注目した。Tのサーブパターン別に、「レシーブの失敗体験」の体験者・非体験者の人数を集計し（表４、中央）、χ^2検定を行ったところ、有意な人数の偏りが見られた（$\chi^2=4.237$、df＝１、$p<.05$）。

また、Tの最初のなぐり描き線により、Tとの関係性がどのように変化するかを検討するため、Tのサーブパターン別に、「レシーブでの被影響体験」を持った者、持っていない者の人数をそれぞれ集計した（表４、右）。これをχ^2検定した結果、有意な人数の偏りがみられた（$\chi^2=4.237$、df＝１、$p<.05$）。

５．一事例の検討

具体的に本調査でのプロセスを検討するために、被験者A（女性、20歳）の事例を取り上げる。Aの被受容感得点は33点、被拒絶感得点は21点であった。この得点は、杉山ら（2006）が調査した際の平均点（被受容感：29.7、被拒絶感：16.3）より共に高かった。

まず、Tが角線をサーブすると、Aは「普通に絵を？」と確認してからレシーブした。猫（図４）を描いたあとに「こんな感じでいいですか。」と再度確認した。Tが〈自由に線を描いてください。〉と促

表４　調査者のサーブパターンによる被験者のサーブ及び体験の違い

Tのサーブパターン	２巡目に描いた線		レシーブ失敗体験		レシーブ被影響体験	
	曲線	角線	あり	なし	あり	なし
曲線から	9(6.3)	1(3.7)	8(5.3)	2(4.7)	2(4.7)	8(5.3)
角線から	3(5.7)	6(3.3)	2(4.7)	7(4.3)	7(4.3)	2(4.7)

（　）内は期待値

図４　１巡目１枚目

図５　１巡目２枚目

図６　１巡目３枚目

図７　２巡目１枚目

図８　２巡目２枚目

図９　２巡目３枚目

すと少し悩み、図５の「曲線」を描いた。Tが蛇にすると「かわいい。」と笑う。３枚目にTが横傍線を描くとAは図６のような舌を出した顔にした。

２巡目の最初にTが曲線のサーブをすると、Aはそれをケーブルにして、小さい頃に持っていた赤い電話の玩具にした（図７）。Aの２回目のサーブは図８のような「角線」であった。それを、Tが家の窓にすると「ビックリした。」と目を見開いた。そして、２巡目、３枚目の横傍線を図９のヨットにして、スクィグル法を終了した。

インタビューにおいて、「緊張しすぎて、これ描いて良いのか、Tの線から離れた位置に描いてもいいのかと思った。」と語ったことから、Tへの“遠慮や不自由さ”があったようである。TがAのなぐり描き線から離れた位置に描き足したことにより、「そのようなやり方も良いのだと思った。」と話す。これは、“被影響”体験の一つと言える。２巡目にAがサーブする際は、「どんな線を描いても何かにしてくれる安心感があった。」「１回目は、最初の（Tの角線サーブ）が浮かびやすかったから、絵が浮かんでくるような線を描いた方がいいのかなと思って描いたけど、こっちのぐるぐるの線（２巡目１枚目の曲線サーブ）は浮かびづらかったから、そういうのでもいいんだと思って、何にも考えずに描いた。」と語る。「浮かびづらかった」と答えたTの曲線であるが、「パーマ」にも見えたと答え、浮かんだイメージ自体は角線よりも多く、「何を描くか」という“葛藤”体験が生じていたようであった。

Ⅳ．考察

１．スクィグル法の体験過程について

結果においても断片的になぐり書き線やスクィグル法での体験に触れたが、本調査の結果で概念化およびカテゴリー化されたスクィグル法での体験は、互いに関係し、影響し合い、図10のようなスクィグル法の体験過程を構築していると想定される。

本論では、スクィグル法開始時点での違いに着目した。ここで施行したスクィグル法の体験の過程においては、描き手自身が画用紙に何かを描く前に相手やその後の展開について考えを巡らせていた場合、実際に描くときには、「簡単なサーブにしておこう」「描きやすいものを描き足そう」と心がけるような傾向が見られた。さらに、被験者Bのように、はじめは「こうしてよいのか？」と遠慮や不自由さがあっても、調査者の様々な描き方に触れ、「それでもいいのか」「どんな線を描いても何かにしてくれる」という、開放感を感じることもある。一方、はじめからあまり考えずに自由に振る舞えていた人の中には、何かしらの後悔や失敗体験を持つ場合があり、その後、計画してから行動する方略にシフトしていた。また、最後まで失敗体験を抱くことなく、終始自由に楽しめた感覚を持っていた描き手もいた。以上の一連の流れの中に、調査者の影響をうける体験、自身の経験や想像に突き動かされる体験が混ざり合って、スクィグル法の体験過程ができあがってくる。今回はこのようなストーリーラインとしてまとめたが、他者から影響を受ける体験がどの

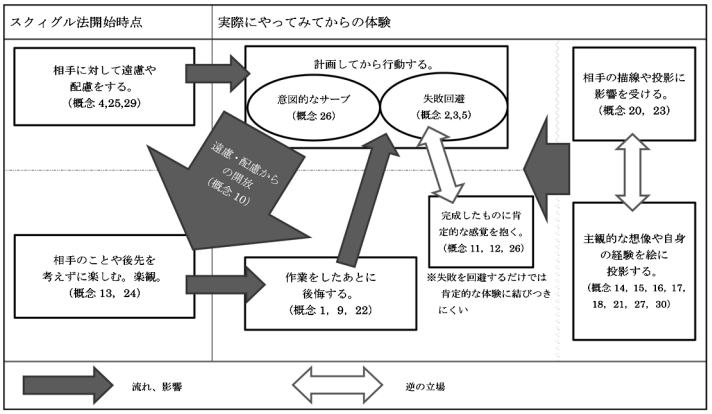

図10　スクィグル法体験の関係性

ように他の体験と関係してくるかなど、より多角的で緻密なストーリーを見いだすことが今後の課題として残される。

2．被受容感・被拒絶感となぐり描き線との関係

一度でも角線を描いた者は、被受容感・被拒絶感が有意に高かったことが示された。角線を描く者は、他者からの受容・拒絶を敏感に感じ取りやすい、または感じ取ろうとしていると考えられる。このように考えた場合、なぜ、受容・拒絶に対して敏感な者が角線を描くのであろうか。事例経過で示した被験者Aは、調査者の曲線サーブに「パーマ」と「電話のコード」の両方を投影し、どちらにするか迷うという“葛藤”が生じていた。結果でも示したとおり、Aを含む一度でも「角線」サーブをした者（角線群）は、曲線のサーブの方がより多くのイメージが浮かびやすかった。相手からの評価に敏感であるために、豊かではないが“葛藤”の少ない、わかりやすいサーブをするという配慮があったのではないだろうか。ただし、Aのように、「どんな線でも何かにしてくれる」という安心感を抱き、角線サーブをする者もいた。藤内（2008）が述べているように、「尖った描線」は相手に窮屈さや圧迫感を与えるという攻撃にも近いニュアンスを持つ。安心感と同時に自身が本当に受け入れられているか確認したい気持ちが起こり、角線サーブによって、確かめ行動としての攻撃を調査者に向けていたと考えられる。

3．最初のなぐり描き線がその後に及ぼす影響

Tが最初に角線のサーブを提示した場合、２巡目に角線を描く者が多くなることが示された。このような現象が起きた理由を探るため、Cの体験を分析した。その結果、最初に角線を受けた場合、「レシーブの“失敗体験”」を持った者が少なくなる一方で、「レシーブの“被影響体験”」を持った者は多いことが明らかとなった。「角線」は「曲線」よりも、被験者に威圧感を与え、そのためレシーブする際に“失敗をする”ほどの自由な感覚を得られなかったのではないだろうか。自身から自由な発想をしにくくなったために、“相手の影響を受けて”何かを成すしかない状態に置かれた可能性がある。被験者AがTのサーブを見て「そういうの（イメージが浮かびにくいなぐり描き線）でもいいんだと思って何も考えずに」角線サーブをしたように、少し緊張が緩んで角線を描いた者もいる。角線サーブを受けた後に曲線サーブ受けると、途端に緊張が緩み、相手への甘えにも近い攻撃的な投げかけが現れやすくなると推測される。ここでは十分に触れられないが、被験者の被受容感や被拒絶感とも織り交り、緊張感の中でなんとか相手を探るための行為として「角線」を描いたとも考えられる。

4．総合考察と今後の課題

スクィグル法は、Winnicott（1971）が、「子どもとコンタクトをつける一つの方法」にすぎないと述べているように、投影検査法としての役割よりも、遊びとしての側面を活かした、相互の関係性の中で行われる側面が非常に強い。そのため、完成した絵だけでなく、サーブやレシーブをする中でも様々な感情体験が起こってくる。田中（1993）が述べているように、スクィグル法を行う上では治療者、患者の双方に、投影に対する不安やためらいが存在していることが知られている。そして、今回の調査から、被験者Aの例にもあるように、描線を行う段階においても、そのような感情や体験が伴うことが示さ

れたのである。これが、問題でも触れた「スクィグル法における三者関係」の一つのあり方といえよう。その在り様は、少なからずその者の人格的側面と関係してくる。

本論では被受容感・被拒絶感という人格特性でなぐり描き線の違いを検証したが、他の人格特性との関連も十分想定することができるであろう。なぐり描き線と人格特性の関連を多角的に検討していくことで、スクィグル法から見えてくる内的世界がより豊かになることが期待される。本研究はスクィグル法のなぐり描き線やサーブ時の体験について数的処理を用いて検討した数少ない研究の始まりといえる。また、今回の研究では探索的に体験を見つけ出し、体験の有無による質的分析を行ったが、今後、この分類された体験を、スクィグル法の各段階における数量的分析の指標として活用し、本研究よりも実証性の高い結果を見出していきたい。

引用文献

藤内三加.（2008）．交互ぐるぐる描き物語統合法（MSSM法）における誘発線の機能について青年期後期を対象とした一考.察奈良大学大学院研究年報（13），141-150

飯塚幸子.（2008）．なぐり描き法における可能性. 人文　学習院大学　7, 67－86

Kellog,R.（1969）．"Analyzing Clildren's Art".Mayfield Pulishing Company.（深田尚彦（訳）（1998）．『児童画の発達過程―なぐり描きからピクチュアへ―』黎明書房．）

木下康仁.（2003）．グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い－．弘文堂

中井久夫（1982）．相互限界吟味法を加味したSquiggle（Winnicott）法 芸術療法，13；17-21

中植満美子.（2004）．子どもの描画と攻撃情動の継時的変化に関する研究―スクィグル・ゲームを通じて―．心理臨床学研究　22（4），381－393

杉山崇・松本真士.（2006）．抑うつと対人関係要因の研究-被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつ的自己認知過程の検討. 健康心理学研究19（2），1-10

田中勝博.（1993）．スクィグル法の実際．臨床描画研究Ⅷ　スクイグル技法／描くということ，19－34

徳田良仁.（1988）．講座サイコセラピー　第７巻　アートセラピー．日本文化科学社

Winnicott,D.W.（1971）．Therapeutic Consultation in Child Psychiatry. Hogarth Press.（橋本雅雄訳（1987）子どもの治療相談①②．岩崎学術出版社）

山崎玲奈．（2008）．スクィグル・ゲームのなぐり描き線に内在するはたらきについて―臨床事例に根ざした実証的研究を手がかりにして―．心理臨床学研究　26（1），59－71